

第2回 川越市まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会 議事要旨

1 開催日時 平成27年8月18日(火) 午前9時30分～正午

2 開催場所 市役所7階7AB会議室

3 出席者

立原雅夫、木村啓子、吉野郁恵、近藤芳宏、今野英子、小野澤康弘、樋口直喜、山木綾子、小林薫、吉田善一、荻野貴、高橋巧、千葉三郎、本田倫江、青山功、松岡伸幸の各委員

4 会議の概要

1 開会

2 会長挨拶

今回より、川越市人口ビジョン及び川越市まち・ひと・しごと創生総合戦略に関する具体的な審議に入ってくる。幅広い分野の皆様が集まっていたが、今後の人口減少社会の対応や川越市の活性化という大きなテーマの総合戦略が策定できるよう審議を進めていきたい。皆様の活発な御意見をよろしくお願いしたい。

3 委員紹介

前回欠席の吉田委員、高橋委員の紹介を行った。

4 議事

(1) 川越市人口ビジョン(素案)について

事務局から前回の議事要旨を市ホームページに掲載した旨の報告及び配布資料の確認と資料に基づき説明を行った。

配布資料に関連した質問等及び意見交換については次のとおり。

【意見の概要及び質疑応答】

○まち・ひと・しごと創生法における「東京圏への人口の過度の集中」と長期ビジョンにおける「東京一極集中」の意味は同じなのか。また、川越市のポジションは東京圏なのか東京圏外なのかの認識についても教えていただきたい。

・「東京圏への人口の過度の集中」と「東京一極集中」は基本的には同じ意味である。また、国の考え方によると東京圏の範囲については、東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県の一都三県と位置づけているため、本市も東京圏に含まれるものと認識している。

○47 ページの上の表、「将来展望推計の結果」についてだが、青い線の将来人口については何も手を打たなかった場合に推移した数字で、オレンジ色の将来展望につい

ては出生率が国が示すとおりに上昇した場合の数字で、灰色の線については何もしなかったかつ封鎖人口でみた場合の数字という考え方でよろしいか。

- ・青い線の将来人口は現状の推移を踏まえシミュレーションしたもの、オレンジ色の将来展望は出生率が国の考え方に基づき上昇したとして仮定したもの、灰色の線については将来人口に対して社会移動を「0」と仮定したもの、いわゆる封鎖人口にしたものになっている。
- 37 ページの「人口シミュレーション結果」中の灰色の線の「シミュレーション 2」と、47 ページの「将来展望推計の結果」の灰色の線の「参考：社会移動均衡ケース」の違いは、出生率が異なっているということではないか。
- ・そのとおりである。
- 分析結果を踏まえてどういう政策を打っていくかが問題になるが、最終的には出生率を上げなければならない。婚姻をして子どもを産み育てる環境が大事になってくるわけだが、女性の働き方が非常に大事になると思う。今回数字でこのような結果が明らかになったが、今後、出生率を上げるための政策についてどのように考えているのか。
- ・出生率を上げていく取組については、女性の働き方をはじめ重要なものと認識しており、子育て環境の整備についても、現在、重点的に取り組んでいるところである。また、総合戦略の中にもそのようなことを重点的に行っていく必要があることを表している。出生率の上昇と社会増減の維持を車の両輪として、人口減少に歯止めをかけていく必要があると認識している。
- 41 ページ、42 ページにあるアンケート調査の結果について説明していただきたい。
- ・41 ページ「結婚意向」については、回答数が 661 人であり、このうち、約 50%の 333 人がいずれ結婚したいと回答している。また、参考資料「川越市まち・ひと・しごと総合戦略策定にあたってのアンケート調査（速報版）」の 10 ページをみると、「いずれ結婚したい」との回答についてはおおむね各年代より得られている一方、若い年代において「結婚するつもりはない」という回答もあることがみてとれる。
 - ・42 ページ「結婚に必要な条件」については、「安定した仕事に就いている」という回答が一番多く、生活の不安がなくなると結婚するということにならないことの表れだと考えられる。また、「結婚資金が確保できる」という回答も多く、経済的な部分が大きいことがみてとれる。
 - ・「理想の子どもの数」については、おおむね複数の子どもを希望していることがみてとれる。
 - ・「出産・子育て環境改善に必要な取組」については、経済的な負担の軽減をしてほしいという回答が一番多い。特に 30 代以降、子育て世帯であると考えられるが、経済的な負担の軽減を望んでいることがみてとれる。次いで、職場の環境やワーク・ライフ・バランスのような雇用環境の改善、保育環境の整備という順で回答数が多かった。
- 45 ページだが、国の考え方に合わせて出生率を 2.07 としているが、出生率を 2.07 以上にすることを検討したかどうか教えていただきたい。

- ・人口が減らないという人口置換水準の 2.07 が上限というような位置づけであると考え、それ以上の出生率の設定でシミュレーションは行っていない。国で示されたこの数字もかなりハードルが高いと認識している。
 - アンケート結果についてだが、全体における男性と女性の回答率が示されているが、設問ごとにおいて男女別の回答数が示されていないため分かりづらい。特に結婚に関しては男女によって考え方が大きく左右されると考えられる。今の社会では若い人たちは欲望が低下している、自分で積極的に欲を持つことが少ないといわれている時代の中で、男女の考え方の違いは大きいことだと考えられる。
 - ・男女別の分析の必要性であるが、今回のアンケート結果は速報版という形で、現在の分析した内容で示させていただいた。いろいろな分析方法が考えられ、男女別においてどのような傾向があるのかということは重要であると考えている。今後はその辺も踏まえ、更にアンケートの分析を進めていきたい。
 - 人口減少問題は国レベルで考えていくものと、社会増減のような自治体等で対応できるものがあると考え。その中で、43 ページ「社会増減の維持のための対策」のところで、「大学進学等で本市に転入してきた若者に、大学卒業や就業後もできるだけ市内に住み続けてもらう対策が重要」とあり、川越市にある大学にできるだけ多く入学してもらうことが前提で、その後川越市の企業に就職してもらえれば社会増減の対策としてはクリアができそうな記載となっているが、川越市として市内にある私立大学の位置づけはどのように考えているのか。
 - ・大学卒業後も引き続き市内に住み続けてもらうことは大変重要なことであるし、大学在籍中の 4 年間であっても市内で活動してもらうということは大変重要なことであると認識している。市内の 4 大学はすべて私立大学であるので、何らかの形で大学との連携を図っていく必要があると認識している。
 - 43 ページで 25 歳～29 歳の年齢層が流出してしまうということだが、16 ページのグラフをみてもそれが分かる。川越市では高校以上、専門学校も含めて 25 校あると聞いている。商工会議所等で企業と大学等との連携は何かやっているのか。
 - 東京国際大学ではインターンシップという形で企業を訪問し、実際に 1 週間ぐらい社会経験するというプログラムを実施しており、商工会議所ではその際の企業紹介などを行っている。また、海外の企業訪問として、商工会議所を通じて、約 3 ヶ月のインターンシップも行っている。
 - 「産官学金労言」という、縦ではなく横の連携が大変重要になってくると思う。川越市だけではなく各自治体いろいろな対応策が出てくると思うが、川越らしさを出してほしい。川越市は、産業では県下で 3 番目であり、大学も 4 つある。県下で一番古い工業高校があるし、市立川越高校もある。農業もバランスよく位置している。川越らしさ、バランスのいいところを出して、横の連携を取っていければいいと思う。
- また、一番記憶に残る華やかな学生時代を川越市で過ごす、川越のいいところを知っているにもかかわらず、市外に出ていくということはとても残念なことである。市で何か対策があれば教えていただきたい。

- ・4 大学の学生が大学卒業後に市外に流出している状態は、川越のまちの実態を理解している学生が少ないのではないかと感じる。市内の学生や市内から市外に通っている学生などに、川越の魅力、地元の良さを知ってもらうためにも、更に連携をしていかなければならない。総合戦略に川越の魅力や地元の良さといった情緒的な部分も政策に入れることにより、若い人に川越をより知ってもらい、若い人が川越に住むことに対して魅力を感じるができるようにしたいと考えている。学生に対するPRをより積極的に行っていければと考えている。
- 川越にある企業・事業所で働いており、川越に住んでいる人のデータを把握しているのか。市役所で働いている人で川越に住んでいる人の比率も低いと聞いたことがある。
- ・市内在勤であり、市内に在住している人のデータについては、次回に示したい。なお、市役所職員であるが、ほぼ半数が市内に住んでいる。
- 川越から市外へ出て行く学生という考え方の中で、市内の4大学の学生が卒業後に出ていくという仮定ではあるが、実際に他市町村から4大学に通う学生というのは、住民登録をしていないと考える。このアンケートは住民票から抽出しているため、4大学に通う他市町村の学生の流出については考えなくていいものなのか。
- ・確かに住民票を異動していない人もいる可能性はあり、そのような人についてはアンケートの結果に反映されていないが、市内の大学に通う学生ということでは市内に住んでいる学生と同じであるので、そういった学生も対策の対象にする必要はあるとの認識である。
- 25歳～29歳の流出については、住民票が川越にありながら、市内の大学ではなく、他都道府県の大学に通っていた学生が、卒業を機に市内にUターンしないで、市外に転出し就職していくことを示しているデータではないか。
- ・確かに市内に住んでいて他都道府県の大学に行っている学生もありうる。そういったことも踏まえ、総合戦略も考えていきたい。
- アンケート結果の男女比についてだが、特に結婚のところについては男女比を示していただきたい。男女比によっては次に打つべき政策が変わってくる。男性は安定した仕事となるかもしれないが、女性は安定した仕事ではなく、安心して生み育てることができる環境がほしいという。男性と女性とでは結婚・子育て・出産に関しては考え方が違うと思うので示してほしい。
- ・結婚などのアンケート結果の男女比については重要なことだと思うので、次回以降に示したい。
- 川越が幸せなまちだと思うのが、44ページでは「川越市に住み続けたい」という人が6割以上になっている。また、「川越市内で就職したい」という人も64%いる。政策がうまくかみ合えば、いい方向へと好転するのではないかと考える。

(2) 川越市まち・ひと・しごと創生総合戦略（素案）について

資料に基づき説明を行った。配布資料に関連した質問等及び意見交換については次のとおり。

【意見の概要及び質疑応答】

- 「産業支援」についてだが、特に労働人口の減少、若者のものづくり離れが問題になっている。先進国の中でも日本は起業家が少なく、21 ページにあるように起業家を作り出していかなければならない。今までの業界、大学でいうと学科・学部など、そういったものをなくしていき、意思と意思のぶつかりでイノベーションを起こさないといけない。そういったことができる場が重要になるということで、アイデアを持っている人、中小企業など技術を持っている人、経営に関するノウハウを持っている人、そういう3者の出会いの場を設けることが大きな手法ではないかと思う。川越という地域は古いところもあり、新しいところもあり、大学も理系・文系があり、多様な人が集まり、自分たちのアイデアを発信する。それに加え、海外からもアイデアを持っている人を呼んでくるような場、アイデアのるつぼというような場を設けることが政策として考えられるのではないかと思う。
- 現在、4 大学が交流する機会が無いため、市が積極的に大学の学生の交流の場を設けてはどうか。
- 江戸時代のものづくりでは礼儀作法、エコロジーに意識が高かった。そういう意味では小江戸という場所であることをうまく利用して、美観外観だけではなく、精神的な面からもまちづくりを行っていくということが大切ではないか。
- 総合戦略では PDCA の管理体制についてどう考えているのか。また各取組に対しても、数値目標が設定されていくのか。
 - ・総合戦略については、平成 27 年から 5 年間という計画であり、その間の進行管理、PDCA は重要だと考えている。現在、国において財源の考え方が明確に示されていないこともあるので、その辺を踏まえつつ、今後 PDCA サイクルのあり方を考えていきたい。また、各施策の KPI については、今回提示した素案にはないが、今後示していきたいと考えている。
- 将来都市像を実現する政策目標として、3 つの目標が十分ではないと思う。1 点目は数値設定のしかたについてであり、総人口 350,000 人以上、年少人口 40,000 人台、生産年齢人口 200,000 人台となっているが、先ほどの人口ビジョンの中で、将来人口推計のままだったとしても 2019 年には総人口 350,000 人以上は達成できる見込みとなっており、年少人口に関しても 40,000 人を切るのが平成 37 年から平成 42 年の間であり、生産年齢人口に関しても 200,000 人台を平成 42 年まではキープできており、将来人口推計において既に達成できる数値となっている。もう少し前向きな数値設定でいいのではないか。
 - 2 点目は政策目標として挙げられている 3 つを達成することによって、本当に若者が住み続けたいと思えるまちとなるのか。25 歳から 29 歳までの転出数などを指標に加えることは検討できるか。
 - ・政策目標の数値設定については、内容をもう少し精査させていただきたい。将来都市像に対して 3 つの指標が妥当かということであるが、将来都市像では若者が住み続けたいと思えるまちと限定したような標記ではあるが、基本的な考え方としては、人口減少に歯止めをかけるということ、本市の経済の活性化の面などから

もこの3つの指標を設定させていただいた。特に将来都市像の若者に関連するところでは、年少人口や生産年齢人口が関わってくると考えている。

- 政策目標は川上の目標で重要な指標だと思うが、人口ビジョンでは出生率や社会移動数が重要とされていたにもかかわらず、数値目標に入っていないのはどうしてか。
 - ・若者の社会移動数なども含め、目標の総人口や年少人口、生産年齢人口を確保していきたいという考え方である。この3つの政策目標で十分かという議論もあるので再度検討させていただきたい。
- 41 ページの「予防接種日お知らせ事業」について、川越市のごみ分別アプリのようにアプリでやっていただきたい。メールよりもアプリで実施した方が利用が多いと思う。
- 43 ページの「イクメン day の創設」について、「独身男性（特にイケメン）」という表記だが、「特にイケメン」の表記はいらぬのではないか。
 - ・削除するような形で対応させていただきたい。
- 42 ページの「学童保育の充実」について、「柔軟な発想により民間が参入しやすいしくみづくり」とあるが、今ある公設公営の学童保育の充実、利用者の利用しやすい学童保育の充実にも努めていただきたいと思う。
 - ・従来の学童保育については引き続き充実を図っていくが、学童保育には時間帯等さまざまなニーズが保護者にはあり、そういった中で民間の活力を取り入れ、より市民のニーズに即した学童保育ができればという視点からの記載である。
- 重点プロジェクト1の「川越いもプロジェクト」、農業の6次産業化は歓迎したい。また、「川越いもを生産します」とあるが川越市が考える川越いもの定義を教えてください。
 - ・川越いもの定義については明確にできないが、ブランド品ということで認知されているものである。ただ、実際の生産については、主に三富地域でされているのが現状である。本市においては観光農園としていもを生産している農業事業者が複数あり、その幅を広げていければという考え方である。
- 現在、市民レベルでいもを栽培したり、いもで町起こしをしようと活動している人たちがいる中で川越いもの定義をめぐって摩擦が起きている。川越いもの定義として、紅赤などの従来から川越で育てられてきたもの、川越の土地で栽培されたサツマイモという2つのものがあり、相容れない。そういったことがあるので行政が主導権をもって、川越いもとしてブランドの認定をしなければならないと思う。少なくとも川越の焼きいも屋で千葉県産のいもが使われている現状がなくなるようにしてほしい。

また、市内には世界に出てサツマイモの作り方などを指導している人もいるので、そういった人の知恵も活用すればよいのではないか。
- 「川越いもプロジェクト」について、「集約した農地や休耕地等を活用して」とあるが、川越市の場合は、休耕地は畑ではなく、田んぼのほうが多いのではないか。川越イコールいもという発想になっているが、最近では巨峰等が的場・笠幡周辺で販売されている。作物によっては台風など自然災害でダメージを受けやすいという

面からみると、いもはダメージを受けにくく投資効果からみればいいかもしれないが、いくつか複数の作物を検討してみたらどうかと思う。最近だとみかんも作り始められているところである。このプロジェクトはいもを中心として、その他の作物などプロジェクトを広げていく形にしていけばよいのではと感じた。

○15, 16 ページで数値目標を掲げているが、基本目標①の中で「納税義務を負う企業数」という指標を設定したことについてだが、起業家や新しく新規事業を起こした者の数ではなく、産業を活性化することにより企業の黒字化を目指すということなのか。国でそのような指標を設定しなさいということなのか。この指標を設定した理由を教えてください。

・納税義務を負うということはそれなりに収益を上げており、利益が出ている状況という認識である。そういった企業を増やすことは、政策目標である一人あたりの市民所得を増やすことにもつながるのではないかと考える。また、利益が出るということは本市の産業の活性化にもつながる。そういった視点からこの数値目標を設定したところである。

○人口構造を変えるという目的があると思うが、出生数が実績値で 2,824 人であり、平成 31 年の目標値では 2,429 人となっており、現状維持ではなくて減少目標になった理由を教えてください。

・出生数は確かに実績値からは下がった数字になっているが、将来人口推計における出生数の数字であり、2,429 人は下回らない、それ以上出生数を上向かせるという意味の表現になっている。

○川越でいろいろ事業をやりたい、工場を作りたいという話がよくあるが、そういう用地が少なく、工場を作りたけれど作れないという人が多い。また、楽天を二子玉川に誘致したことによって、二子玉川の人口が増えたといわれるように、川越も西武や東武、銀行もあるので、IT 企業のようなものを誘致できるようなオフィスを作って、企業を誘致するということが必要ではないか。

○遊ぶということで、グリーンツーリズムが挙げられていることは良いと思うが、川越市は川が多いがその環境が生かされていない。川岸で遊ぶような雰囲気が全くない。地方や関西にいくと川と親しんでいるというか少なくとも小舟ぐらいはある。自然をもっと生かしたほうがいいのではないか。

○フェイスブックに川越市のグループが出来ており、民間の人が 5,000 人ほど参加している。そこではさまざまな民間の人が川越の良いところ、それも普段気づかないような細かい良いところを紹介している。そのようなものを活用することもいいのではないか。

○公の場で結婚相手を探すということに関しては、女性が嫌がるイメージがある。しっかり対象者の意見を聞かないと、婚活のようなものやってもうまくいかないと感じるので、意見をよく聞いた方がよい。

○川越の蔵造りなどを活性化させるには、観光客だけではなく、生活をしている市民が遊べるまちにならないといけないのではないか。

○「まるごとコンシェルジュ」について、「④目指せ！出生率 2.0!!!」とあるが、

まち・ひと・しごと創生法に「結婚や出産は個人の決定に基づくものであることを基本」とあるように、結婚等についてさまざまな事情や考えがあるため、そのような文言を追加したほうがいいのではないかと。

- ・結婚や出産についてはあくまでも個人の自由な決定に基づくものであるということは当然のことであり、国においては希望するという表現を使っており、本市としてもそのような考えであるため、表現については検討していきたい。
- 42 ページの第3子及び多胎児産前後ヘルパーの派遣について、第1子の母親に対する支援についてどう考えているか。右も左も分からない、どうしても力が入ってしまう第1子の産後直後でつまづいてしまうと2人目の出産につながらないと思うので、そのような点から第1子の母親のサポートに力を入れるようなものがあると思う。
- ・第1子の母親に対する支援の拡充については、対応ができるかどうかも含めて、検討させていただきたい。

(3) その他

【次回の会議日程について】

- ・次回の会議日程については現在調整中であり、正式に決まり次第、後日通知させていただきます。

5 副会長挨拶

木村副会長が、閉会に当たり挨拶を行った。

6 閉会

以上